スペイン語キリスト教文献における存在表現の他言語との比較に関する考察（1）
――スペイン語文法から見たキリスト教哲学――

水　戸　博　之

スペイン語、ポルトガル語、ラテン語、ギリシア語、教会の祈り、聖務日課、Liturgia Horarum（時課の典礼）、存在論、文法、キリスト教哲学、神学

0．はじめに

本論においては、スペイン語における存在表現を、近親関係にあるポルトガル語、また両言語の系統上の祖先であり、近代語として確立する過程において規範でもあったラテン語との比較を中心に考察が行われる。

「存在」あるいは「ある（有る、在る）」の表現は、日常的な言語において通常、半ば無意識のうちに使用されるとともに、他方、「存在論」は、西洋哲学、特にキリスト教哲学において、古代から現代に至るまで、数多くの哲学者や神学者たちが取り組んできた難問の一つである。一方、日本における西洋哲学の研究は、すでに一世紀以上の歴史を持ち、分野によっては、本家である欧米に勝るとも劣らない成果を挙げる水準に至っている。しかしながら、筆者自身は、多くの先学の研究成果を享受してきた一学徒でありながら、自分が何を学び、何が分かったか、分かっていないか、と改めて問うと、やはり「存在する」ということを、果たしてどの程度理解しているのか、日本語という言語を通じて咀嚼しているのか、という問題に突き当たることをあらためて認識するのである。

0．1．第一の問題：文法

この問題意識の根底には、筆者が永年スペイン語教育に携わり、入門段階のしかも比較的早い時期に、スペイン語の特性とも言える、英語の be 動詞の機能が ser と estar に大きく役割分担されること、そして Hay… の存在を表現する構文を、毎年教授していることがある。また、以前、マタイ福音書をコーパスに、スペイン語では消滅しつつある法時制である接続法未来を、系統的に近いポルトガル語との対応を考察した際に、同一箇所でありながら、時制に差異がある事例が少なからずあることには気がついていた。この問題を、当初、完了と未完了の観点から分析しようと考えていたが、動詞の意味によって動作態、いわゆるアスペクトが変化することをはじめ、何に焦点を当てるべきか、

考えあぐねていた。

20年以上前から、断続的に目を通してきた、スペイン語版の聖務日課（または時禱書、Liturgia de las Horas）の「灰の水曜日 Ceniza」（2013年は2月13日）の日から数日に対応するポルトガル語版とラテン語版を、たまたま見比べたところ、ser の少なくとも時制の用法に関してはかなり異同があるらしいということに気がついたのである。動詞の性質上、意味からの考察の対象は限定されたものとなるであろうが、むしろ限定されているがゆえに、同一箇所の対応関係が解明できるのではないかという見通しを立てた。これが第一の問題点である。

０．２．第２の問題：聖書と古代・中世哲学における「存在」

本論の「存在表現」の広義の思想史に関わる領域は、二つの起源あるいは潮流が融合したところと考えられる。すなわち、一つは聖書における「神の存在」であり、もう一つはギリシア哲学の形而上学における「存在論」である。いずれも日常的な言語において語られる「存在」あるいは「有る・在る」ではない。しかしながら、同一の語彙 ser や existir などで語られ記述されている。文法的な視野における「存在」と哲学・神学上の「存在」とは、使用語彙の共通性以外に、いかなる点で結びつき、他方、いかなる点で異なるのであろうか。これが第2の問題点である。

０．２．１　聖書における神の存在の記述

旧約聖書の次の一節が、あらゆる思索の出発と言えよう。

> 神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたくしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」『出エジプト記』第3章14節。
> （聖書の引用と書名は特に説明のない場合は『新共同訳』による。）

キリスト教文献の論考でありながら、ここで早くも筆者の能力と言語的視野の制約を認めなければならない。すなわち、旧約の原典はヘブライ語であるが、筆者は原典を直接論考できるほどには、この言語に精通していないということである。ただ、少なくとも、山田晶教授はじめ先学の研究に基づいて指摘しうることは、『わたくしはある』が未完了形であり、このことがギリシア語七十人訳、ラテン語訳、様々な近代語訳に反映され継承されているということである。[1] なお、この箇所の言語的・文法的考察については、後に、新約の「ローマの信徒への手紙」や「ヨハネの黙示録」などにおいて見られる現在形以外の例とともに行いたい。

０．２．２　古代・中世哲学における‘esse’または「存在」の３様の意味

「アリストテリコ・トマス哲学」あるいはトマス・アクィナス（Thomas Aquinas 1225(4)-1274 以下トマス）をアリストテレスの延長上で解釈してきたとされるいわゆる伝統的トミスムでは、トマスは三つの意味でラテン語の動詞不定詞であわらされる‘esse’を区別したとされる。すなわち、山田晶教授（以下、山田）の解説によれば、1)「本質のエッセ」esse essentiae、2)「存在のエッセ」esse existentiae、3)「コプラ（繋辞）としてのエッセ」copula である。さらに、これらを現代語（日独）に対応させると、1)「何かである」Etwas-sein 2)「現実に存在する（がある）」Wirklich-sein 3）命題の主語と述語を結合する「コプラ」ist となる。

ところで、山田は、この 3 区分が 15･16 世紀のトマス学者が正統的解釈として固定したものであり、必ずしもトマス自身の見解を十分に反映したものではなかったとし、精緻な再検討を行なっている。その結果、3 区分はトマス初期の著作『命題集註解』においてのみ見られるものの、後の『神学大全』においては、1）の意味でのエッセには決して言及せず、2)（トマス自身の著作では「エッセのアクトゥス」actus essendi）と 3）コプラの二つの意味に限定される。[2]

０．３　スペイン語圏の哲学研究の思想史における位置と言語的環境

日本のみならず、欧米においても、スペイン語圏の哲学文献の位置は、少なくとも近現代哲学においては、いかにウナムーノ（Miguel de Unamuno 1864-1936）やオルテガ・イ・ガセット（José Ortega y Gasset 1883-1955）あるいはスビリ（Xavier Zubiri 1898-1983)の独創性を強調しても、やはり傍流あるいは後進地域であることを認めざるを得ないであろう。また、デカルト（René Descartes 1596-1650）以前、スアレス（Francisco Suárez 1548-1617）の著作が教科書的な規範性を持っていたとしても、それはラテン語で記されていたものであった。

トマスに代表されるいわゆるスコラ哲学は、現代における近代語研究文献を除けば、原典に関しては、ほぼ全てがラテン語で記述されてきたと言っても過言ではないであろう。一方、スペイン語圏では、研究者の大半がつい最近までラテン語による教育を受けてきた聖職者であることから、少なくとも 1930 年代生まれのカトリック司祭は、スペイン語に翻訳する必要性を感じないという。さらに、これ以前の事柄として、言語系統的にもスペイン語が第一言語または母語話者であることは、ラテン語で記された文献研究に極めて有利な立場であると思われ、実際、一面においては事実である。他方、筆者が把握している限り、スペインにおいては、トマスをはじめ、16・17 世紀のビトリア（Francisco de Vitoria 1483-1546）スアレスら現代の自然法論の礎を築いたとされる著書のスペイン語訳や羅西対訳版が出版されるようになったのは、意外に遅く、1970 年代後

半のいわゆるフランコ没後（Francisco Franco Bahamonde 1892-1975）である。[3] 言語的優位性がむしろ研究の現代化の足かせになったとも言えるであろうか。

０．３．１　現代スペイン語圏における存在論研究

厳密な意味での本研究の先行例ではないが、存在論をスペイン語の言語的特性において検討したものとしては、アルゼンチンで活動したイスマエル・キレス神父（Ismael Quiles Sánchez 1906-1993）の in-sistencia の思想をあげることができるだろう。この哲学史的背景について一言触れると、第２次世界大戦後、強い影響力を持ったハイデガー（Martin Heidegger 1889-1976）やサルトル（Jean-Paul Sartre 1905-1980）らの実存主義（existencialismo）の無神論的傾向に対抗すべく、スペイン語の ser と estar の２動詞の相違とともに、特に estar en sí に着目して体系化を試みた思想である。名称の造語法的要素についていえば、接頭辞の ex- と in- の違いである。しかし、実存主義が無神論へ向かう危険があるといわれる理由は、キリスト教神学の存在論においては、創造者である神と被造物である人間の関係は、たとえ何らかの類比（analogía）を認めることができたとしても、本来、絶対的な差異と隔たりがある。他方、実存主義はその違いを否定しようとする。図式的すぎるがその違いは次のように説明できよう。神の本質は端的に存在である。神においては本質と存在は一致するのに対し、人間は被造物である限り、天使とともに知性的ではあっても、その本質は存在と同義でも同値でもない。実存主義には様々な見解があるが、一言で言えば、創造者にのみ認められる本質即存在、あるいは存在即本質の様相を、人間に認め「実存」と呼称する立場である。他方、人間が神の地位を僭称した否定的側面は近現代史を見れば明らかであろう。なお、キレス自身は “insistencialismo” を用語として用いていないようである。[4]

その他、近現代におけるスペイン語による形而上学的思索の例としては、ハビエル・スビリの存在論を指摘できるが、検討はキレスの in-sistencia とともに今後の課題としたい。

０．３．２　ラテン語とスペイン語との間の用語の対応と相違点

ところで、上述０．２．２において言及した ‘esse’ または「存在」の３様の意味がスペイン語で十分問題なく表現できるかというと、いくつか大きな困難を伴う。

まず、スペイン語全体の特性でもあるが、動詞の原型（ここでは “ser”）が不定詞として名詞的に用いられる点はラテン語と共通している。問題となるのは、「存在するもの・存在者」の意味で使用する際、スペイン語は、この “ser” を名詞として多くの場合、定冠詞等を付し、複数形にし、あるいは形容詞を加え：los seres humanos 人類；Ser Supremo 神と表現せざるを得ないということである。すなわち、ラテン語のように “esse” と “ens”

の語彙上の区別はできないということである。他方、ラテン語の制約となりうる点は、格変化はあっても冠詞を所有していない、“ens” は中性名詞で複数と斜格形を持つが、対応するギリシア語の現在分詞 ὤν, οὖσα, ὄν のように 3 つの文法性の形は取りえない。

もう一つ、スペイン語の語形または語彙の制約として留意すべき問題点は、“gerundio” 形（一般に「現在分詞」と訳される）“siendo” は持っていても、語形的に対応するはずの “gerundium（動詞的中性名詞。主格形は欠く）” の意味 “essendi（ただし古典ラテン語では存在しない）” では用いられていないようである。すなわち、“actus essendi 存在の現実態” は、“el acto de ser” とスペイン語に訳されている。[5] やはり哲学・神学文献という特殊な用例であっても、基本的に副詞的機能である “gerundio” を名詞的に扱うことに強い抵抗があるためであろうか。

ちなみにスペイン語とラテン語との語源的関係はどうであろうか。ser および関連する estar, existir の語源について、一般的な辞書の記述を整理すると次のようになる。[6]

ser：不定詞 ←［ラ］sedére「座っている」；直説法現在・過去・不完了過去、接続法過去 ←［ラ］esse「存在する，…である」；直説法未来・可能形・接続法現在 ←［ラ］sedére

estar：←［ラ］stare「立っている，とどまっている」

existir：←［ラ］exsistere「出現する；存在する」（ex-「外へ」＋ sistere「置く；立つ」）

ser が法時制により語源が二重になっている点については、今後、用例の分析において留意したい。

以上は、スペイン語母語話者ではない筆者が指摘しうることであるが、スペイン語圏の研究者にとっても、“ser” は用語として少なからず困難を伴うもののようである。例えば、アルゼンチンで出版された「トミスム入門」：Gustavo Eloy Ponferrada, “Introducción al Tomismo”, Buenos Aires, 1985[7] においては、“el Ser (p.167-p.205)” の章の第 2 節 “b) El ser en cuanto ser (p.170-p.172)” の冒頭で次のように解説されている。[8]

b）有（存在）である限りの有（存在）

カスティーリャ語（スペイン語）においては、ser という術語は両義的である。すなわち、*名詞 nombre* として、動詞 ser に欠落している［名詞・形容詞的機能の］分詞を補うために用いられるが、また*動詞 verbo* として、不定詞の機能で用いることも可能である。第一の場合においては、存在する*主体 sujeto* を示すのに対し、第二の場合は、存在の*現実態 acto* を示す。ラテン語においては、他方、聖トマスは、二つの明確な単語で、語っている。*ens* は存在の現実態を現出する基体を意味し、*esse* は現実態自体を示している。私達の言語（スペイン語）では、混乱を回避するために、17 世紀に、［動詞的機能の］現実態を表す単語 ser を保持しつつ、“ser” が本来持っていない分

詞を補うものとして、*ente* という術語が作られた。しかしながら、これらの単語を必要とする用例 *uso* は、逆方向をたどった。すなわち、*ser* は不定詞から分詞に転換し、存在する基体を表すために用いられ、他の動詞 *existir* が、その空隙を占めるようになり、結果、存在の現実態を示すに至る。([名詞・形容詞的機能の]、[[動詞的機能の]は筆者が補った。] [9]

"ser" の両義性に起因する esse と ens の混同は、必ずしもスペイン語に限ったことではないようである。山田も著書の中で、両言語あるいは古典語と近代語の相違が一因となったであろう「エッセとエンスとの混同」「エッセとエンスの区別」の問題に二つの章にあてている。[10] スペイン語では、さらに estar や Hay…（仏 Il y a… に相当）との関係が問題になると考えられるが、用例を検討する際に留意すべき事柄としたい。

結局のところ、スペイン語の中の日常的用例も含む存在表現と西洋中世哲学の存在論とはいかなる点で関連するであろうか。結論を先取するようであるが、研究の見通しを述べることが許されるならば、少なくとも経験に基づいた漠然とした印象論の段階でも、スペイン語における存在の ser の用法は数量的にはわずかであり、圧倒的に copula の用例が多数であることは間違いないであろう。一方、筆者の理解が間違ってなければ、山田の「トマス・アクィナスの《エッセ》研究」では、「生成」や「成立」などの概念が検討されていても、動詞の時制が問題となる意味での時間的考察は直接的な検討の対象となっていないようである。興味深い点は、単に神が超時間的存在であるから対象外というのではなく、エッセ esse とエクシステレ exsistere との区別の考察において、神と生物や人間、神性と人性が結合するキリストについて、時間的歴史的存在であるか否かが論じられていることである。[11] これら二つの語の問題は、先に訳出したスペイン語における ser の動詞的機能を existir が担うに至った過程とも何らかの関連性があるのではないか。哲学的思索と、近代語の言語的特性および制約下における文法的考察との関係は、決して疎遠なものではないと思われる。

0．4　テキストの選択：Liturgia de las Horas（ポ Liturgia das Horas; ラ Liturgia Horarum；日 教会の祈り・聖務日課・時課の典礼）[12]

複数の言語を対照研究しようとする際、言語間の対応の正確さや信頼性に関しては、聖書をはじめとするキリスト教文献の各国語版に勝るものはないであろう。本研究において、日々の祈りの書である Liturgia de las Horas（本論では旧名である「時課の典礼」を訳名とする）を選択した理由としては、翻訳の正確さの他に次の2点をあげることができる。

1）聖書とともに教父の著作のアンソロジーであり、収録された文献が多様であること。

2）祈りの書であることから音声とのつながりが明らかであること。ある 1930 年生まれのスペイン人司祭の話によると、かつては黙読ではなく、朗読あるいは音読を義務付けられていたとのことである。音読か黙読かの問題で想起されるのは、アウグスティヌス（Aurelius Augustinus 354-430）の「告白 Confessiones」第六巻第三章に見出されるアンブロシウス（Ambrosius c.339-397）の読書の様子の記述である。

ところで彼が読書していたときには、その目はページを追い、心は意味をさぐっていましたが、声と舌とは休んでいました。（山田晶訳）[13]

文字に記された言語と音声とのつながりは、テキストが日常言語ではないとしても、常に意識すべきことと思われる。なぜならば、言語の生命力の源泉とでも呼ぶべきものが、音声とのつながりを維持することで、しばしば死語と呼ばれるラテン語おいても枯渇していないという証しであると思われるからである。筆者のわずかな経験であるが、スペイン語に限らず英語でも同様、母語話者と読み合わせながら添削を行う際、しばしば母語話者が「音で読んでいる」のに対し、自分は「目で読んでいる」ことに気がつくからである。

０．４．１　検討の進め方、使用する版など

基本的な流れは、スペイン語版、ポルトガル語版、ラテン語版の順に存在表現が表れる箇所を列挙し、文法的観点から考察を行う。[14] 必要に応じて、英語版や関連するラテン語やギリシア語の文献を参照する。

カーニバルが移動祝祭日であるとことからも分かるように、毎年、カトリックの典礼歴は変化する。本稿では、2013 年の移動主日･祝祭日表に従い、2 月 13 日「灰の水曜日 miércoles de ceniza」から紙面の許すところまで進む（本論における用語は主にスペイン語を使用）。なお､「灰の水曜日」は「四旬節 ス cuaresma, ラ quadragesima」の最初の日であるが、復活祭（ス Pascua, ラ Pascha 3 月 31 日）に向け準備を行う、回心と罪の償いの期間（日曜日を除く 40 日間）とされる。

Liturgia de las Horas（時課の典礼）の構成はかなり複雑であるが、本研究で主に対象とする箇所は、次の通りである。Primera Lectura（第一朗読：聖書）、Segunda Lectura（第二朗読：聖書に関連する教父の著作）、以上 Propio de tiempo（典礼歴［ここでは四旬節と復活祭］に配置された特定典礼文）。Salterio distribuido en cuatro semanas（四週間で一巡する詩篇朗読。聖書に対応し配分されている。）、Propio de los Santos（諸聖人の特定典礼文。多くの場合、殉教の日を記念日とし固定されている。）

０．４．２　収録する用例

スペイン語版において、ser, estar（狭義の「存在」や「所在」の用法のみならず助動詞的な場合も含む），hay 存在文のほか、consistir en, quedar, encontrarse など、ラテン語やポルトガル語版において広義の存在表現に対応しうると考えられる場合、スペイン語版と他言語の該当箇所を対照できるよう用例を収録した。

１．Liturgia de las Horas　時課の典礼

＊典礼歴による一日の日課を一つのまとまりとした。4 週一巡の詩篇の朗読は同一箇所を複数回朗読することになるので、第 2 回目以降は省略。

＊各版 Esp. Por. Lat. の後の数字は、第 2 巻のページを示す。

＊適宜、各言語を示す際、ス・ポ・ラ・ギ等、略号を用いた。

＊該当箇所を太字で示す。

＊特に表記がなければ、聖書は新共同訳、教父の著作は筆者の私訳。なお共同訳の読みがなは省略。

＊訳名等は原則としてスペイン語版に付す。聖書の節番号は、スペイン語版では項目全体のみ。日本語の節番号は掲載した部分。

＊複数の言語間の文法用語の統一は困難であることから、各言語で一般に通用するものを使用した。

Tiempo de cuaresma miércoles de ceniza　四旬節　灰の水曜日　2013 年 2 月 13 日

Esp. 42

Primera Lectura　第一朗読

Del libro del profeta Isaías 58, 1-12　イザヤ書 58, 8–9

Entonces romperá tu luz como la aurora, en seguida te brotará la carne sana; te abrirá camino la justicia, detrás irá la gloria del Señor. Entonces clamarás al Señor, y te responderá; gritarás, y te dirá: **“Aquí estoy.”**

8 そうすれば、あなたの光は曙のように射し出で／あなたの傷は速やかにいやされる。／あなたの正義があなたを先導し／主の栄光があなたのしんがりを守る。9 あなたが呼べば主は答え／あなたが叫べば／「**わたしはここにいる**」と言われる。

Por. 41

Primeira leitura

Do Livro do Profeta Isaías 58, 1-12

8 Então, brilhará tua luz como a aurora e tua saúde há de recuperar-se mais depressa; à frente caminhará tua justiça e a glória do Senhor te seguirá.

9 Então invocarás o Senhor e ele te atenderá, pedirás socorro, e ele dirá: **“Eis-me aqui”.**

Lat. 39

Lectio prior

De libro Isaíae prophétae 58, 1-12

8 Tunc erúmpet quase auróra lumen tuum, et sanátio tua cítius oriétur ; et anteíbit fáciem tuam iustítia tua, et glória Dómini cólliget te.

9 Tunc invocábis, et Dóminus exáudiet, clamábis, et dicet : **« Ecce adsum ».**

この箇所で印象的なことは、いずれの言語においても応答の「わたしはここにいる」の力強さである。ポルトガル語の下線部を除き、他のすべての動詞は未来形の単純形であることも、応答の効果を高めている。ポの下線部 haver de inf. は「…となるはずである」といった帰結的な意味があるだろうか。ポ **“Eis-me aqui”** は、スペイン語ならば古風な響きの Heme aquí. となるであろう。ラ **« Ecce adsum »**「見よ、私は傍らにいる」は近代語より Septuaginta（七十人訳）と対応するようである。古典語の接頭辞 ad-, παρα- は「ここ」よりも「そば・傍ら」の語感に思われる。[15]

(II p.644) 58.9 … ἔτι <u>λαλοῦντός σου</u> ἐρεῖ ’Ιδοὺ πάρειμι.

なお、ス gritarás に対応する下線部の箇所のみ現在分詞属格の独立用法（genetivus absolutus）になっているが、他の版と異なる点である。

Tiempo de cuaresma jueves después de ceniza 「灰の水曜日」後の木曜日　2 月 14 日

Esp. 51

Responsorio Gn 15, 13-14; Is 49, 26　応唱　創世記 15,14 イザヤ書 49,26

R. Yo juzgaré al pueblo a quien han de servir.

V. **Yo soy el Señor**, tu salvador y redentor.

R. しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。

V. わたしは主、あなたを救い、あなたを贖う。

Por. 50

Responsório

R. Eu, porém, hei de julgar a quem eles servirão.

V. **Sou o Senhor**, teu Salvador, **sou o Senhor**, teu Redentor.

Lat. 47

Responsorium

R. Et gentem, cui servitúri sunt, ego iudicábo.

V. **Ego Dóminus** salvátor tuus et redémptor tuus.

ス **Yo soy el Señor** を除き、人称代名詞と ser に相当する動詞は他の版には両者同時には見られない。また、ポ **Sou o Senhor** は、人称代名詞 Eu が現れない代わりに、反復され強調されている。スペイン語とポルトガル語間で興味深い対照は、関係文と主文の動詞について haber de inf. (haver de inf.) と単純未来形とが入れ替わっていることである。イザヤ書のラテン語 salvator tuus の部分は異同があるようである。B.A.C. 版では以下の通り現在分詞で te を目的語にしている。（下線、筆者）

Et sciet omnis caro すべて肉なる者は知るようになる /

Quia ego Dominus <u>salvans te</u>, わたしは主、あなたを救い、/

Et redentor tuus fortis Iacob. あなたを贖うヤコブの力ある者であることを。

ラ cui servituri sunt が servio の未来分詞 + sum 直説法現在形を使用し、未来形受動相 servientur を使用していない点が注意を引く。創世記 15,14 の七十人訳の対応箇所は次のように ἐάν + アオリスト接続法を使用している。

τὸ δὲ ἔθνος, ᾧ ἐὰν δουλεύσωσιν, κρινῶ εγώ.

ラテン語の関係文中の法時制は、古典期のものではないと思われる。未来分詞を含む複合形を用いることで、助動詞部分が直説法であるが、ギリシア語のアオリスト接続法との対応を表そうとしたのであろうか。

Esp. 51

Segunda Lectura　第二朗読

De los sermones de san León Magno, papa　レオ 1 世大教皇（在位 440–461）の説教から

(Sermón 6 sobre la Cuaresma, 1-2: PL 54, 285-287)　説教 6　四旬節について 1–2

Siempre, hermanos, *la misericordia del Señor llena la tierra*, y la misma creación natural es, para cada fiel, verdadero adoctrinamiento que lo lleva a la adoración de Dios, ya que el cielo y la tierra, el mar y **cuanto en ellos hay** manifiestan la bondad y omnipotencia de su autor y la admirable belleza de todos los elementos que le sirven está pidiendo a la criatura inteligente una acción de gracias.

常に、兄弟たちよ、*地は主の慈しみで満ちている（詩篇 32(33)5)*、まさに自然の創造は、ひとりひとりの信者にとって、神の崇拝に導く真の教えなのです。なぜならば、天と地、海そして**それらの内に有るあらゆるものが**、それらの製作者の善性と全能を顕示し、彼に使えるあらゆる要素の驚嘆すべき美しさが、知性的被造物に対し、感謝の行動を求めているからです。

Por. 50

Segunda leitura

Dos Sermões de São Leão Magno, papa

Em todo tempo, amados filhos, *a terra está repleta da misericórdia do Senhor* (Sl 32,5). A própria natureza é para todo fiel uma lição que o ensina a luvar a Deus, pois o céu, a terra, o mar e **tudo o que neles existe** proclamam a bondade e onipotência de seu Criador; e a admirável beleza dos elementos postos a nosso serviço requer da criatura racional uma justa ação de graças.

Lat. 47

Lectio Altera

Ex Sermónibus sancti Leónis Magni papae

Semper quidem, dilectíssimi, *misericórdia Dómini plena est terra* ; et uniquíque fidélium ad coléndum Deum ipsa rerum natúra doctrína est, dum caelum et terra, mare et **ómnia quae in eis sunt**, bonitátem et omnipoténtiam sui protestántur auctóris, et famulántium elementórum mirábilis pulchritúdo iustam ab intellectuáli creatúra gratiárum éxigit actiónem.

太字の部分の存在表現は三者三様である。動詞については、ス hay、ポ existe、ラ sunt であり、他方、関係詞または先行詞も相違が見られる。すなわち、ス cuanto ある限りのもの、ポ tudo o que 全てのもの、ラ omnia quae　中性複数形で「全てのもの」である。ポルトガル語の代名詞 tudo はスペイン語には対応する語がない。

もう一つ注目すべき点は、引用された詩篇について、主語は「地」のはずであるが、スペイン語版では「主の慈しみ」が主語で「地」が動詞 llenar の直接目的語のように見える。参考に七十人訳を以下に示す。繫辞 ἐστίν が表れていないが、語順はラテン語と対応する。

τοῦ ἐλέους κυρίου πλήρης ἡ γῆ.

14 de febrero（諸聖人の特定典礼文）

Esp. 1378

San Cirilo, monje, y San Metodio, obispo Patronos de Europa

修道士聖キュリルスと司教聖メトディウス　ヨーロッパの守護聖人

Lectura　朗読

De la Vida eslava de Constantino Cirilo　コンスタンティヌス・キュリルスのスラブにおける生涯 [16]

(Cap. 18: Denkschriften der kaiserl. Akademie der Wissenschaften 19, Viena 1870, p. 246)

“Desde ahora ya no soy siervo ni del emperador ni de hombre alguno sobre la tierra, sino sólo de Dios todopoderoso. **Primero no existía, luego existí, y existiré para siempre.** Amén.”

今からはもはや私は、皇帝の下僕でも地上のいかなる人間の下僕でもなく、全能の神のみの下僕である。はじめ私は存在しなかったが、後に存在した。そして永遠に存在するだろう。アーメン。

Por. 1442

Leitura

Da Vida eslava de Constantino

“A partir de agora, já não sou servo nem do imperador nem de homem algum na terra, mas unicamente do Deus todo-poderoso. **Eu não existia, mas agora existo e existirei para sempre.** Amém”.

Die 14 februarii

Lectio

E Vita Constantíni slávic

Lat. 1319

“Ab hoc témpore non sum servus neque imperatóris neque hóminis cuiúspiam in terra, sed Dei tantum omnipoténtis. **Non eram et éxstiti et ero in aetérnum.** Amen.”

太字の箇所は非常に興味深い例であるとともに、筆者には驚きであった。なぜならば、先ず3言語とも2つ目の動詞に関して、ス・ポ existir ラ exsisto と同系の単語を使用しているにも関わらず、時制についての捉え方が、筆者の従来の理解とかなり異なるものだったからである。すなわち、ス：不定過去、ポ：現在、ラ：完了過去となる訳であるが、聖書のスペイン語とポルトガル語諸版間の比較のみならず、日常的な用法においても、筆者は漠然と、スペイン語が未完了の現在形を取り、ポルトガル語が完了としての完全過去形を取る傾向があると考えていたのとは、反対の現象がここで見られるからである。また、スペイン語のよく分かるブラジル人留学生の説明するところでは、ポルトガル語の口語においても現在形が使用される頻度は、スペイン語ほど高くないという。

3言語ともに、第1の動詞が未完了過去で、第3の動詞が単純未来である。時制の差異の表れる第2番目の動詞に影響する接続詞と副詞について注目して見よう。ラテン語版は、sum の未完了過去形と未来形の間に、動詞 existo が完了形となって現在の状況を強調している感があるが、接続詞 et を繰り返すことにより3つの要素をつないで、時の流れが漸進的な印象がある。一方、スペイン語版は副詞 primero と luego の対応、ポルトガル語版は、逆接の接続詞 mas と副詞 agora の対応により、存在せず無であった過去との対比を強調しているように思われる。

Tiempo de cuaresma viernes después de ceniza 「灰の水曜日」後の金曜日　2月15日

Esp. 58

Primera lectura　第一朗読

Del libro del Éxodo 2, 1-22　出エジプト記 2,11-12

Pasaron los años, Moisés creció, fue adonde estaban sus hermanos, y los encontró transportando cargas. Y vio cómo un egipcio mataba a un hebreo, uno de sus hermanos. Miró a un lado y a otro, y **viendo que no había nadie**, mató al egipcio y lo enterró en la arena.

11 モーセが成人したころのこと、彼の同胞のところへ出ていき、彼らが重労働に服しているのを見た。そして一人のエジプト人が、同胞であるヘブライ人の一人を打っているのを見た。12 モーセは辺りを見回し、**だれもいないのを確かめると**、そのエジプト人を撃ち殺して死体を砂に埋めた。

Por. 56

Primeira leitura

Do Livro do Êxodo 2, 1-22

11 Um dia, quando já era adulto, Moisés saiu para visitar seus irmãos hebreus; viu sua aflição e como um egípcio maltratava um deles. 12 Olhou para os lados e, **não vendo ninguém**, matou o egípcio e escondeu-o na areia.

Lat. 53

Lectio prior 2, 1-22

11 In diébus illis, postquam créverat, Móyses egréssus est ad fratres suos; vidítque afflictiónem eórum et virum AEgýptium percutiéntem quandam de Hebráeis frátribus suis. 12 Cumque circumspexísset huc atque illuc et **nullum adésse vidísset**, percússum Aegýptium abscóndit sábulo.

この箇所も言語によって構文がかなり異なる。七十人訳を示す。

12 περιβλεψάμενος δὲ ὧδε καὶ ὧδε **οὐχ ὁρᾷ οὐδένα** καὶ πατάξας τὸν Αἰγύπτιον ἔκρυψεν αὐτὸν ἐν τῇ ἄμμῳ.

第12節を構文で対照させると以下のようになる。

ス：直・不定過去，y **分詞構文（知覚動詞＋ que 節.）**，直・不定過去 y，直・不定過去 .

ポ：直・完全過去 e, **分詞構文（知覚動詞＋目的語）**，直・完全過去 e 直・完全過去 .

ラ：Cumque 接・完了過去 et **接・完了過去（不定詞句＋知覚動詞）**，

（過去分詞・対格）直・完了過去 .

ギ：アオリスト分詞・主格　直・現在？ (εἶδεν?) καί アオリスト分詞・主格

＊ 11-12 に2回 ὁρᾷ が見られるが、歴史的現在と考えられる。[17]

これらの中で存在表現と認められるのは、スペイン語の no había nadie とラテン語の nullum adesse である。他の2言語において、「見る・見える」が基本意である知覚動詞と否定語によって、日本語において「だれもいないのを確かめる」と表現できる点は、注意すべき事柄である。

Tiempo de cuaresma sábado después de ceniza 「灰の水曜日」後の土曜日　2月16日

Esp. 65

Primera lectura　第一朗読

Del libro del Éxodo 3, 1-20　出エジプト記 3,4-5

Viendo el Señor que Moisés se acercaba a mirar, lo llamó desde la zarza: "Moisés, Moisés." Respondió el: **"Aquí estoy."** Dijo dios: "No te acerques; quítate las sandalinas de los pies, pues el sitio que pisas es terreno sagrado." Y añadió: **"Yo soy el Dios de tus padres,** el Dios de Abrahán, el Dios de Isaac, el Dios de Jacob."

4 主は、モーセが道をそれて見に来るのをご覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「**はい**」と答えると、5 神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」6 神は続けて言われた。「**私はあなたの父の神である**。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」

Por. 64

Primeira leitura

Do Livro de Êxodo 3, 1-20

4 O Senhor viu que Moisés se aproximava para observar e chamou-o do meio da sarça, dizendo: "Moisés! Moisés!" Ele repondeu: **"Aqui estou".** 5 E Deus disse: "Não te aproximes! Tira as sandálias dos pés, porque o lugar one estás é uma terra santa". 6 E acrescentou: "**Eu sou o Deus de teus pais,** o Deus de Abraão, o Deus de Isaac e o Deus de teus pais, o Deus de Abraão, o Deus de Isaac e o Deus de Jacó".

Lat. 60

Lectio prior

De libro Exodi 3, 1-20

4 Cernens autem Dóminus quod pérgeret ad vidéndum, vocávit eum Deus de médio rubi et ait : « Móises, Móyses ». Qui repóndit : **« Adsum ».** 5 At ille: "Ne apprópies, inquit, huc; solve calceaméntum de pédibus tuis ; locus enim, in quo stas, terra sancta est ». 6 Et ait : « **Ego sum Deus patris tui**, Deus Abraham, Deus Isaac et Deus Iacob ».

4 ὡς δὲ εἶδεν κύριος ὅτι προσάγει ἰδεῖν, ἐκάλεσεν αὐτὸν κύριος ἐκ τοῦ βάτου λέγων

Μωυσῆ, Μωυσῆ. ὁ δὲ εἶπεν **Τί ἐστιν;** 5 καὶ εἶπεν Μὴ ἐγγίσῃς ὧδε· λῦσαι τὸ ὑπόδημα ἐκ τῶν ποδῶν σου· ὁ γὰρ τόπος, ἐν ᾧ σὺ ἕστηκας, γῆ ἁγία ἐστίν. 6 καὶ εἶπεν αὐτῷ Ἐγώ **εἰμι ὁ θεὸς τοῦ πατρός σου**, θεὸς Αβρααμ καὶ θεὸς Ισαακ καὶ θεὸς Ιακωβ.

第4節の新共同訳「はい」と各言語との対応は興味深い。同様な表現が、上述イザヤ書58, 8-9「わたくしはここにいる」に見出されたが、ここでは軽い意味なのであろうか。ギリシア語 Τί ἐστιν; は、文字通りには「何がありますか？」であるが、スペイン語の ¿Qué hay? など他の言語でも、軽い挨拶としてよく使われる表現である。

第5節「私はあなたの父の神である。」について、すべての言語が逐語的に対応している。

人称代名詞（yo, eu, ego, ἐγώ）＋ copula（soy, sou, sum, εἰμι）＋神

「神」については、もともと冠詞の存在しないラテン語を除き、すべて定冠詞で始まっている。なお「父の」部分は、2古典語は単数属格、近代語は de+ 複数形で表されている。

この第一朗読の後半部第13-14節が、神自身が「ある者」という名をモーセに示す場面である。神の存在論の根源となり、哲学と神学とが綜合される箇所でもある。[18]

出エジプト記 3, 11-15

Esp. 66

Moisés replicó a Dios: «**¿Quién soy yo** para acudir al Faraón o para sacar a los israelitas de Egipto?» Respondió Dios: «**Yo estoy contigo;** y ésta es la señal de que yo te envío; cuando saques al pueblo de Egipto, daréis culto a Dios en esta montaña.» Moisés replicó a Dios: «Mira, yo iré a los israelitas y les diré: "El Dios de vuestros padres me ha enviado a vosotros",; si ellos me preguntan cómo se llama, ¿qué les respondo?» Dios dijo a Moisés: «**"Soy el que soy"**, esto dirás a los israelitas: "**'Yo-soy'** me envía a vosotros."» Dios añadió: «Esto dirás a los israelitas: "El Señor Dios de vuestros padres, Dios de Abrahán, Dios de Isaac, Dios de Jacob, me envía a vosotros. Éste es mi nombre para siempre: así me llamaréis de generación en generación."

11 モーセは神に言った。「**わたしは何者でしょう。**どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」12 神は言われた。「**わたしは必ずあなたと共にいる。**このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導きだしたとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」13 モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたの先祖の神が、私をここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」14 神はモーセに、「**わたしはある。わたしはあるという者だ**」と言われ、また、「イスラエ

ルの人々にこう言うがよい。『**わたしはある**』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。15神は、さらに続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名。これこそ、世々にわたしの呼び名。

Por. 64-65

11 E Moisés disse a Deus: "**Quem sou eu** para ir ao Faraó e fazer sair os filhos de Israel do Egito?" 12 Deus lhe disse: "**Eu estarei contigo;** e este será o sinal de que fui eu que te enviei: quando tiveres tirado do Egito o povo, vós servireis a Deus sobre esta montanha". 13 Moisés disse a Deus: "Sim, eu irei aos filhos de Israel e lhes direi: 'O Deus de vossos pais enviou-me a vós'. Mas, se eles perguntarem: 'Qual é o seu nome?' o que lhes devo responder?" 14 Deus disse a Moisés: ***"Eu Sou aquelle que sou".*** E acrescentou: "Assim responderás aos filhos de Israel: '**Eu sou** enviou-me a vós'". 15 E Deus disse ainda a Moisés: "Assim dirás aos filhos de Israel: 'O Senhor, o Deus de vossos pais, o Deus de Abraão, o Deus de Isaac e o Deus de Jacó, enviou-me a vós'. Este é o meu nome para sempre, assim serei lembrado de geração em geração.

Lat. 61

11 Dixítque Móyses ad Deum: «**Quis sum ego,** ut vadam ad pharaónem et educam fílios Israel de AEgýpto?». 12 Qui dixit ei: «**Ego ero tecum;** et hoc habébis signum quod míserim te: cum edúxeris pópulum de AEgýpto, serviétis Deo super montem istum». 13 Ait Móyses ad Deum: «Ecce, ego vadam ad fílios Israel et dicam eis: Deus patrum vestrórum misit me ad vos. Si díxerint mihi: "Quod est nomen eius?", quid dicam eis?». 14 Dixit Deus ad Móysen : **«Ego sum qui sum».** Ait: «Sic dices fílius Israel: Qui sum missit me ad vos». 15 Dixítque íterum Deus ad Móysen : «Haec dices fíliis Israel : **Iahveh (*Qui est*),** Deus patrum vestrórum, Deus Abraham, Deus Isaac et Deus Iacob misit me ad vos; hoc nomen mihi est in aetérnum, et hoc memoriále meum in generatiónem et generatiónem.

11 καὶ εἶπεν Μωυσῆς πρὸς τὸν θεόν **Τίς εἰμι**, ὅτι πορεύσομαι πρὸς Φαραω βασιλέα Αἰγύπτου, καὶ ὅτι ἐξάξω τοὺς υἱοὺς Ισραηλ ἐκ γῆς Αἰγύπτου; 12 εἶπεν δὲ ὁ θεὸς Μωυσεῖ λέγων ὅτι **Ἔσομαι μετὰ σοῦ,** καὶ τοῦτό σοι τὸ σημεῖον ὅτι ἐγώ σε ἐξαποστέλλω· ἐν τῷ ἐξαγαγεῖν σε τὸν λαόν μου ἐξ Αἰγύπτου καὶ λατρεύσετε τῷ θεῷ ἐν τῷ ὄρει τούτῳ. 13 καὶ εἶπεν Μωυσῆς πρὸς τὸν θεόν ,Ιδοὺ ἐγὼ ἐλεύσομαι πρὸς τοὺς υἱοὺς Ισραηλ καὶ ἐρῶ πρὸς αυτούς Ὁ θεὸς των πατέρων ὑμῶν ἀπέσταλκέν με πρὸς ὑμᾶς, ἐρωτήσουσίν με Τί ὄνομα αὐτῷ; τί ἐρῶ πρὸς αὐτούς; 14 καὶ εἶπεν ὁ θεὸς πρὸς Μωυσῆν **Ἐγώ εἰμι ὁ ὤν**· Καὶ εἶπεν Οὕτως ἐρεῖς τοῖς υἱοῖς Ισραελ **Ὁ ὢν** ἀπέσταλκέν με πρὸς ὑμᾶς. 15 καὶ εἶπεν ὁ θεὸς πάλιν πρὸς Μωυσῆν Οὕτως ἐρεῖς τοῖς υἱοῖς Ισραηλ Κύριος ὁ

θεὸς τῶν πατέρων ὑμῶν, θεὸς Αβρααμ καὶ θεὸς Ισαακ καὶ θεὸς Ιακωβ, ἀπέσταλκέν με πρὸς ὑμᾶς· τοῦτό μού ἐστιν ὄνομα αἰώνιον καὶ μνημόσυνον γενεῶν γενεαῖς.

神とモーセとの対話の部分である。第11節モーセが神に尋ねる「わたしは何者でしょう。」の箇所は、ギリシア語に ἐγώ が現れない他は、各言語逐語的に対応する。興味深いのは、その後の二つの目的節または句で、スペイン語版が追加的な接続詞 “y” ではなく、選言的な “o” を使用していることである。第12節、それに対する神の言葉「わたしは必ずあなたと共にいる。」に該当する部分の「いる」の動詞は、ス・ポ両言語 estar であるが、時制は4言語中スペイン語のみが現在形で他は未来形である。「必ず」に対応する副詞は直接的にはどの言語にも表れないが、未来形と現在形といずれが確実性を持って響くであろうか。さらにスペイン語は、それに続く「このことを、わたしがあなたを遣わすしるしである。」もすべて直説法現在を使用している。この点では、ギリシア語が τοῦτό σοι [ἐστίν] とコプラを欠く代わりに与格を持っている以外、“esto te [es]” となりスペイン語に一番近いといえる。他方、ポ・ラ2言語は法時制に関してかなり複雑である。

ポ：este será o sinal de que fui eu que te enviei:

直・未来　直・完全過去　直・完全過去

「これが、あなたを遣わしたのがわたしであったことのしるしとなろう」

ラ：hoc habébis signum quod míserim te:

直・未来　接・完了過去

「あなたはこれをわたしがあなたを遣わしたしるしとして持つであろう」（筆者試訳）

ギリシア語の与格 σοι を所有の用法として、繫辞の未来 erit ではなく、tu を主語に habeo を用いている。ラ・ポ共に関係文の動詞が過去である点が注意を引く。

つぎに第12節後半部の時の副詞節・句と未来形を取る帰結節の関係をまとめてみよう。

ス：cuando saques	接・現	, daréis culto	直・未
ポ：quando tiveres tirado	接・未来完了	, servireis	直・未
ラ：cum eduxeris	接・完了過去	, servietis	直・未
ギ：ἐν τῷ ἐξαγαγεῖν σε...	前置詞＋第2アオリスト不定詞句	, λατρεύσετε	直・未

主節がすべて直説法未来であるのに対し、副詞節や句は多様である。中でもポルトガル語が複合時制を用いている。

第13節、モーセの神に対する言葉において、前半部で神の指示を1人称未来で復唱した後、神の名を何と答えたらよいかと問う。条件節と帰結節の対応に日本語訳と他言語とでは異同が見られるようである。

ギリシア語は条件節を使用せずに、未来形の表現を積み重ねていく。“ἐλεύσομαι 私は行く .... καὶ ἐρῶ そして私は語る ..., ἐρωτήσουσίν με 彼らは私に尋ねる ...; τί ἐρῶ 何を私は

語るか？ ..;”

ス：Si me preguntan	直・現	, ¿qué les respondo?	直・現
ポ：Mas, se perguntarem	接・未	, o que lhes devo responder?	直・現 義務の助動詞
ラ：Si dixerint mihi	未来完了, quid dicam eis?		直・未
	（先立未来）		

なお、『…私をここに遣わされたのです」の箇所、ス・ラ・ギ語が（現在）完了形 me ha enviado, misit me, ἀπέσταλέν με を使用しているのに対し、ポは完全過去形 enviou-me である。

モーセが問われるであろう『その名は一体何か』を間接疑問文で表しているのは、スペイン語のみである。他方、“cómo se llama” は、日本語も含め他の言語訳からは異質な感じがする。

第 14 節で神自身から神の名がモーセに啓示される。神の名は、名称でありながら言語の表現力を超越している。各言語訳を比較対照してみよう。

「わたしはある。わたしはあるという者だ」;『わたしはある』;「主」

ス：Soy el que soy	Yo-soy	El Señor Dios ...
ポ：*Eu Sou* aquele que sou	Eu sou	O Senhor, o Deus ...
ラ：Ego sum qui sum	Qui sum	Iahveh (Qui est), Deus...
		（Vulgata では Dominus）
ギ：Ἐγώ εἰμι ὁ ὤν	Ὁ ὤν	Κύριος ὁ θεός ....

各言語ハイフォンや斜体を用い、様々な工夫をしている。七十人訳から西欧語の訳が成立したことから、一覧表は順序を今までとは反対に、ギリシア語から並べるべきであったかもしれない。筆者がまず注目する点は、「わたし」が人称代名詞として表れているか否かということである。同時に、各言語の表現力と文法的制約もあらためて見出すことができる。例えばギリシア語においても、Ὁ ὤν 単独では「あるという者」までは分かっても、次に続く動詞 ἀπέσταλκεν（3 人称単数）のみを見ると、「わたし」であることは分からない。スペイン語が yo を通常の形で使用していないことが注意を引く。またス・ポともに、Yo-soy, Eu sou と本来文であるものをあえて一語の如く扱っていることも 2 古典語とは異なる点である。他方、「主」の表記は、スペイン語が El Señor との後にコンマを打っていないが、冠詞を付す語は異なるものの、ギリシア語の Κύριος ὁ θεός .... に近いと考えられる。日本語は、語順は異なるものの、主と神を同格の様に訳出することにより、ギリシア語との対応を反映していると考えられる。意外というか非常に興味深いことは、各言語の規範となるラテン語版 Liturgia Horarum が通常 Vulgata 訳で用いられる Dominus ではなく、Nova Vulgata 訳 Iahveh（ヤハウェ；英：Yahweh）とし、しかもカッコ内に斜体で 3 人称単数の Qui est「あるという者／彼はあるという者」を付してい

る点である。祈りにおける言語の限界を知らしめんとしたのであろうか。

以上で、「灰の水曜日」（2013 年 2 月 13 日）から「灰の水曜日後の土曜日」（2013 年 2 月 16 日）までに見出される幾つかの用例について検討を行なった。

---

[1] 山田晶教授（1922-2008）にはついにお目にかかる栄誉には恵まれなかったが、本稿執筆にあたっては哲学・神学の分野に関し多くのものを負っている。当該箇所の 3 古典語の記述と後世への影響については、著書「在りて在る者」創文社、1976、p.6 の注 1 で次のように簡潔に説明している。「・・・ヘブル原文は、《'ehyeh 'asher 'ehyeh.》。「エヒイエ」は「在る」を意味する動詞 hâyâh の第一人称単数未完了形。それゆえ《Ego sum qui sum.》というラテン訳は原文の直訳である。ギリシア七十人訳によれば、《Ἐγώ εἰμι ὁ ὤν.》ここで「私は在る者」が「在る者」ὁ ὤν と訳されていることは、イスラエルの神をギリシア哲学の在るもの」ον と関連づける端緒となった。アレクサンドリアのフィロンは、この箇所にもとづいてイスラエルの神をギリシア哲学、特にプラトン哲学によって解釈し、以後「在る者」なる神のギリシア哲学的存在論的解釈は、ギリシア、ラテンの教父をへてスコラ哲学にいたる伝統となった。・・・・」

[2] 山田晶「トマス・アクィナスの《エッセ》研究」創文社、1975, p.50-p.58: 1 エッセの探求第八章エッセ解釈の歴史（一）。特に p.53 と引用文注 5 と注 6。

[3] 独裁体制下においても、内容的に直接言論統制の対象になるような文献であったとは思えないのであるが、当時の B.A.C.（Biblioteca Autores Cristianos キリスト教著作家叢書）の運営などとともに、再度、体制移行期の出版状況は検討に値する事柄のように思える。

[4] キレスの全集は 1978 年に刊行開始され、第一巻が 1950-1960 に発表された in-sistencia に関する論考である。Obras de Ismael Quiles s.j. 1: "Antropología filosófica in-sistencial", Buenos Aires, 1978.

[5] ラテン語の哲学用語の訳語については、できる限り次の語彙集に従った：長倉・蒔苗・大森（編）「トマス・アクィナス『神学大全』語彙集（羅和）―創文社版, 中央公論社版による―」、新世社、1988。

[6]「小学館　西和中辞典」、1990: p.1741, p.851, p.874。ラテン語のアクセントは筆者。

[7] 本書は、Club de Lectores 社（ブエノスアイレス）により刊行されているが、同市に所在する Fundación Jacques Maritain（ジャック・マリタン財団）の助成を受けている。この財団は、J. マリタン（1882-1973 フランスの哲学者、新トマス主義者）の著書と関連するトマス研究等の出版と普及を目的としている。

[8] "El ser en cuanto ser (ラ ens in quantum ens)" は、前掲「語彙集」では、"ens in quantum est ens 有たるかぎりにおける有"。

[9]「分詞」は "participio" の訳であるが、ラテン文法の名詞・形容詞的機能を持つ本来の意味での「現在分詞」である。以下、原文 p.170 を示す。"en castellano el término *ser* es ambivalente: puede usarse como *nombre*, supliendo la carencia de participio que adolece el verbo "ser", y como *verbo*, en función de infinitivo. En el primer caso indica al *sujeto* que es; en el segundo, al *acto* de ser. En el latín, en cambio, Santo Tomás contaba con dos vocablos precisos: *ens* para significar el sujeto que ejerce el acto de ser y *esse* para designar al acto mismo. Para evitar confusiones se creó en nuestra lengua, en el siglo XVII, el término *ente* como supletorio del participio de "ser" inexistente, reservando el vocablo *ser* para expresar el acto. Sin embargo el *uso*, que es el que impone los vocablos, ha seguido un curso

inverso: emplea *ser* para indicar al sujeto que es, convirtiendo al infinitivo en participio; otro verbo, *existir*, vino a ocupar la vacante dejada ya así designa al acto de ser.”

[10] 山田は前掲書第一部に「トマスのエッセ忘却と発見の歴史」という副題を付し、第一章「エッセの問題性」から立論し、次の2章でエッセとエンスの混同と区別について論じている。

[11] 山田、op. cit., p.355-p.365:「第三八章　エッセとエクシステレとの区別とその根拠」。特に p.361「(四) キリストのエッセとエクシステレ」参照。

[12] 第二バチカン公会議（1962-1965）で再編集された Liturgia Horarum（1971-72）の現在の日本語訳名は「教会の祈り」であるが､「聖務日課」や第二バチカン公会議以前の「時課の典礼」の名称も、旧版といえる Breviarium Romanum（1568）を通常テキストとする教会音楽作品などでは用いられている。http://homepage2.nifty.com/pietro/storia/officium.html に簡潔な新旧対照表が掲載されている。時課の構成については次を参照。http://salveregina.dyndns.org/avemaria/special/liturgia_hora.html（2013/06/12 アクセス）

[13]「世界の名著 14 アウグスティヌス 告白 山田晶訳」、中央公論社、1968, p.191。引用箇所に山田や注を付け説明している。「(4) ギリシアおよびローマにおいては、書物は韻文にせよ散文にせよ、高声に朗読されるのが習慣であった。それゆえアンブロシウスの黙読は、アウグスティヌスに奇異の感を与えたのである。…」原文：“sed cum legebat, oculi ducebantur per paginas et cor intellectum rimabatur, vox autem et lingua quiescebant.” 動詞がすべて未完了形であることから、回想のなかのアンブロシウスの習慣であったことがわかる。http://www9.georgetown.edu/faculty/jod/latinconf/6.html（James J. O’Donnell による web 版から 2013/06/12 アクセス）。Migne 版 Patrologia Latina では Tomus XXXII, col.720。

[14] 各言語とも通常4分冊で刊行され、第2分冊が検討の対象となる。スペイン語版とポルトガル語版は、スペイン、ブラジル、アメリカ合衆国の各司教団から承認を得たものである。中表紙の記載は次の通りである。なおブラジル版とラテン語版には、Nova Vulgata（新ヴルガタ訳聖書）に関する Decretum Congregationis pro Cultu Dinino（1985年4月7日）が掲載されている。ヨハネ・パウロII世の時代の修正で、これらは第2版ということになるが、初版に基づく各国語訳も流通を続けており、差異は本論に大きな影響を与えないと思われる。

“Oficio Divino / Reformado por mandato del Concilio Vaticano II y promulgado por Su Santidad El Papa Pablo VI / Edición típica / Aprobada por la Conferencia Episcopal Española y confirmada por la Sagrada Congregación para los Sacramentos y el Culto Divino / Liturgia de las Horas según el rito romano II / Tiempo de Cuaresma / Santo Triduo Pascual / Tiempo Pascual, Coeditores Litúrgicos (España), 1988.”

“Ofício Divino / Renovado conforme o decreto do Concílio Vaticano II e promulgado pelo Papa Paulo VI / Tradução para o Brasil da segunda edição típica / Litugia das Horas segundo o rito romano II / Tempo da Quaresma / Tríduo Pascal / Tempo da Páscoa, Editora Vozes / Paulinas / Paulus Editora Ave-Maria, 2000.”

“Officium Divinum / Ex decreto sacrosancti oecumenici Concilii Vaticani II instauratum auctoritate Pauli PP. VI promulgatum / Ligugia Horarum iuxta ritum romanum / editio typica altera II / Temus Quadragesimae / Sacrum Triduum Paschale / Temus Paschale, Libreria Editrice Vaticana, 1986.”

“The Divine Office / revised by decree of the Second Vatican Ecumenical Council and published by authority of Pope Paul VI / The Liturgy of the Hours / According to the Roman Rite / Approved by

the Episcopal Conferences of The Antilles, …Uganda, and the United States of America for use in their dioceses and Confirmed by the Apostolic See II / Lenten Season Easter Season / English Translation Prepared by the International Commission on English in the Liturgy, Catholic Book Publishing Corp. (New York), 1976."

[15] 使用テキスト：Septuaginta Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes edidit Alfred Rahlfs Editio minor Duo volume in uno, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, 1935. 詩篇から第二分冊である。

[16] Cyrilus（ギ Kyrillos 827–869）は、Metodius（885 没）と兄弟で、典礼テキストをスラブ語に翻訳するため、キリル文字の基となったグラゴール文字を考案。キリル文字自体は 10 世紀はじめブルガリアで作られた文字。Esp.1377、広辞苑「キリル文字」；新カトリック大事典（研究社）「キュリロスとメトディロス」（Ⅱ　212–213）、「グラゴール文字」（Ⅱ　603）の項、参照。

[17]「秦剛平（訳）七十人訳ギリシア語聖書 II 出エジプト記」、河出書房新社、2003 年、p.22：注 22・23 参照。

[18] 神の「名」の哲学的・神学的考察については、山田「在りて在る者」の特に p.97–p.102：「二在りて在る者（トマスの解釈）第二一章　神の名としての「在る者」（二）見落とされてきた「名」としの重要性」を参照。